

2023 年度
修士学位請求論文要旨

外国人介護者を対象とする日本語教育における
映像コンテンツの活用
—文化の違いに配慮した実践的な日本語指導の
観点から—

国際日本学研究科 国際日本学専攻

多文化共生・異文化間教育研究領域

4911223004 李賽爾

本論文の目的は、介護現場で働く外国人学習者を対象とした日本語教育において、彼らの文化や価値観の違いを配慮しながら、身体性を含むコミュニケーションの仕方を教えるために、教師が映像コンテンツの活用に着目し、行っている指導の特徴を明らかにすることである。

日本の介護現場では、外国人労働者が増加している（厚生労働省，2023）。外国人労働者が介護現場で働く上で課題となるのが、言語能力や日本の文化理解に基づいた立ち振る舞いである。実際に、外国人労働者の多くは、日本の介護現場への適応に困難を抱えている（大和，2020）。しかしながら、外国人労働者は介護現場特有の言語や文化的コミュニケーションに関する十分な日本語教育を受けないまま現場に派遣されているのが現実である。この課題に対して、介護現場で働く外国人学習者の指導をする日本語教師らは、介護現場における言語コミュニケーションおよび身体性を含む非言語コミュニケーションを円滑に進めるために必要な日本語能力を養成するために、映像コンテンツを活用することが多い。言うまでもなく、映像を活用するだけで、彼らの介護現場での日本語運用能力や行動様式が向上するわけではない。そこで、教師は映像活用の際、彼らの文化的背景を考慮しながら授業で実践し応用できるようにしている（稲村，2010）。しかしながら、従来の研究では、映像コンテンツの活用の成果や意義については示されているが、それを活用する上で、何を、どのように配慮しながら外国人学習者の日本語を指導しているかについては議論されてこなかった。そこで、本研究では、介護現場で働く外国人学習者向けの日本語教育において、異文化間教育を専門とする日本語教師が、映像コンテンツを活用する際に、文化的背景をどのように考慮して介護現場に必要な日本語を教えているかを分析する。

第1章では、「外国人介護者が現場で直面する言語・文化に関する課題」、「介護現場における非言語コミュニケーションの重要性」、「現場理解を促進する映像コンテンツの活用実践と課題」および「身体性に着目した映像コンテンツの活用」に関して先行研究のレビューを通して論じた。先行研究のレビューを通して介護現場で働く外国人学習者の課題として明らかになったことは、介護現場の高齢者の個々の健康状態や文化的背景に応じた専門知識とコミュニケーション能力が足りていないということである。その課題解決のためには、介護現場特有の専門用語や表現を理解し使用できるように教える日本語教育が必要であることを明らかにした。一般的な日本語教育では高齢者とのコミュニケーションや日本の文化や歴史に関する知識、高齢者が使う方言の使用などをほとんど扱わない。これは、工場勤務などでの作業レベルの日本語運用では問題ない。しかし、介護現場では、利用者の感情や思いを表情から読み取り、身振り、視線などの身体的動作のような非言語的表現から利用者のニーズを理解し、適切なケアを提供するための言語・非言語コミュニケーション能力や知識が必要であり、そのための日本語教育が求められていることを指摘した。その上で、その具体的な問題解決へのアプローチとして映像コンテンツを活用した日本語教育を取り上げ、その成果と課題を示した。日本語教育では、映像コンテンツを実際の言語使用の理解・習得と非言語コミュニケーションの理解促進のために使用してい

る。しかし、先述のとおり、外国人学習者が介護現場で映像コンテンツから学んだことを実践していくためには、学習者の文化的背景を考慮し、身体性を含むコミュニケーションにおける違いを踏まえた上で活用する必要がある。

第2章では、先行研究のレビューを踏まえて、本研究の目的と意義を示した。研究の目的は、介護現場で働く外国人学習者を対象とした日本語教育において、教師は学習者の文化や価値観の違いから来る身体性を含むコミュニケーションの難しさを考慮し、映像コンテンツの活用に着目し、いかに指導を行っているかを明らかにすることである。本研究の学術的意義は、介護教育における異文化間コミュニケーションの研究に新たな視点を加えることにある。特に、映像コンテンツを用いた教育方法の探求は、言語教育と文化教育の領域において新しい知見を提供する。実践的意義としては、映像コンテンツを介した教育が、介護現場で働く外国人学習者に日本の文化やコミュニケーションスタイルを深く理解させる手段となり、介護現場での効果的なコミュニケーションを促進することである。これにより、介護の質の向上と、介護現場で働く外国人学習者と日本の高齢者との間でのより良い関係構築とが期待される。また、日本の少子化に伴い、介護現場で増え続けている外国人介護者へのオンライン教育に対する指針を提供する。この教育アプローチは、介護現場で働く外国人学習者が日本社会や介護環境にスムーズに適応することを助け、日本社会が文化的多様性を受け入れるための重要な一助となる。さらに、日本の高齢化社会における介護人材不足問題への対応策としても意義がある。

第3章では、調査対象、調査方法、分析方法について論じた。本研究で取り扱う実践は、異文化間教育を専門とする日本語教師Xが担当する、介護現場で働くインドネシアからの特定技能の外国人学習者を対象としたオンライン授業である。筆者は、この実践のフィールドに身を置き、参与観察、インタビューなどを行い、データを収集した。データの分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った。

第4章では、調査対象となる実践の概要について述べた。本研究が研究対象とした実践は、神奈川県S市のI特別養護老人ホームで働く外国人介護者である。研究に協力してくれたクラスは、インドネシア出身の特定技能1号「介護」のビザを持つ20代の男女3人の外国人介護者を対象とするクラスである。参与観察を行なった授業は、週に1度50分の授業がオンライン（ZOOM）で行われていた。本研究ではそのうち6回の授業データを分析した。

第5章では、分析の結果を示し、考察を行った。分析の結果、以下の4点が明らかになった。1つ目は、学習者の文化的背景に考慮した映像コンテンツを選択したこと、2つ目は、学習者の言語障壁を理解ために映像コンテンツを使用したこと、3つ目は、学習者の批判的思考能力を高めるために、映像コンテンツを通じて実践的な例を提供したこと、4つ目は、学習者の対話的学習を促進するために映像コンテンツを使用したことである。

第6章では、総合考察とまとめを述べた。本研究は、以下の3点が明らかになった。1つ目は、教師が映像コンテンツの選択においてその有効性を認識し、意図的に選んだこ

と、2つ目は、教師は映像コンテンツの不十分さを意識し、異文化間の違いに基づいて詳細な説明や実践的な指導を行ったこと、3つ目は、教師が映像コンテンツを活用し、学習者との異文化間コミュニケーションの促進を図ったことである。

最後章の第7章では、本研究の課題と展望を示した。本研究では、映像コンテンツを活用した日本語教師が、文化的差異への配慮と身体性を含むコミュニケーションに着目をし、何を目的にどのように授業を行ったのかを明らかにすることができた。しかし、その授業が学習者、つまり介護現場で働く外国人学習者自身の現場での業務や実践に有用であったかどうかまでは評価ができなかった。この点を明らかにするためには、学習者が働いている職場環境についても詳しく調査し、その関連や影響を見ていく必要がある。これにより、教育方法の効果をより包括的に評価し、学習者が実際に介護現場において、映像コンテンツから学んだ内容をどのように応用できるようになったかを理解することができる。また、本研究では、本研究テーマの調査において最適だとされる異文化間教育を専門とする日本語教師1名のみの授業を研究対象としたが、同じように文化的差異への配慮や身体性を含むコミュニケーションに着目した他の教師の実践とも比較検討してモデル化することで、介護現場で働く外国人学習者に対する、より効果的な日本語教育方法の開発に寄与することが期待される。